

4 西洋近現代思想

4.1 近代思想の誕生

4.1.0 中世末期 西ヨーロッパの時代と思想

カトリック教会権威の衰退

13世紀初め	教皇権の最盛期	()	, 独帝・英王・仏王を破門, 圧迫
1309	教皇のバビロン補囚	仏王フィリップ4世, 教皇クレメンス5世を()に	強制移転
1339~1453	()戦争	英仏間の戦争	⇒領主・騎士階級の衰退, 農民自由化, 市民階級の進出, 国王による集権化
1376	オクスフォード大学神学教授()		, 教会の改革を唱え, 教皇権を否定
1378~1417	教会大分裂()	ローマとアヴィニョンに二人の教皇が立って争う。	
1414	()公会議	教会分裂の解消, プラハ大学神学教授()のウィクリフ	信奉と反化体説等に異端宣告, 焚刑
1419~36	フス派戦争	フス処刑後, ボヘミアで反カトリック戦争	
1453	()帝国滅亡	オスマントルコのメフメト2世	コンスタンティノーブル攻略

スコラ哲学の解体

13世紀 盛期スコラ哲学

- ・() …信仰と理性の総合: アリストテレス哲学を神学の下に取入れる

⇒14世紀 後期スコラ哲学: 神学と哲学の分裂

- ・マイスター・エックハルト (1260-1328 ドイツ, ドミニコ会)
 - : ドイツ神秘主義, 神の本質との完全なる合一, 魂における神の誕生←新プラトン主義
 - ルターへの影響
- ・ドゥンス・スコトゥス (1265頃-1308 スコットランド, フランシスコ会)
 - : トマスの総合を批判して, 学問的により厳密な新しい総合を企てる
 - 二重真理説: 神学と哲学の区別: 重大な解決は神学, 哲学的知識には制限あり
- ・() (1285頃-1349 イングランド, フランシスコ会)
 - : 経験主義, 唯名論, 人間と全能不可知の神の間には計り知れない隔たり
 - 哲学と神学の分離 哲学=感覚的経験に基づく記号操作⇒論理的普遍的世界認識
 - 神学=神の全能の原理⇒神の意志に人が主体的に従うことが倫理
 - cf.オッカムのかみそり: 思考節約の原理: 必要なしにものごとの説明原理を多数化してはならない
 - ⇒観察された事実, 論理的自明性, 神的啓示など, 十分な根拠なしにはいかなる命題も主張してはならない →近代科学的思考・論理の法則
- ・() (1401-64 ドイツ枢機卿) 『知ある無知』
 - ルネサンス期新プラトン主義のもと《対立物の一致》を説く。有限者においてはさまざまな区別や対立が見いだされるが, 無限なる神においてそれらはすべて一致する。
 - 個体の重要視, 数学・科学的研究の強調, 世界はある意味で無限であるとする自然観

4.1.1 ルネサンス

⇒資 p.164

ルネサンス 仏 Renaissance : 14 世紀 () に始まる古典文化の復興運動「文芸復興」

19 世紀 仏の歴史家ミシュレ、スイスの歴史家ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』の概念

暗黒の中世：神が中心，文化の発展が低調

↓

ルネサンス：ギリシア・ローマの古典文化の復興：人間性尊重，合理的精神⇒近代の萌芽

※中世は暗黒の時代だったのか？ 古典文化は中世滅んでいたのか？ ルネサンスの思想は科学的・合理的か？

【イタリア・ルネサンスの歴史的・社会的背景】

- ・十字軍（東方への遠征） ⇒ 東方 () 貿易 ⇒ 都市社会，商業活動の発展
ex. フィレンツェ，フェラーラ，ミラノ，ベネチアなど
- ・1453 年オスマン帝国による () 陥落 ⇒ ギリシア古典学者イタリア亡命
⇒ ギリシア語学習熱の高まり ex. フィチーノ，プラトンアカデミー設立（フィレンツェ）
- ・14 世紀 ペスト（黒死病）の流行 ⇒ 「死のことを想え ()」

【ルネサンスの先駆】

()：フィレンツェ生まれの詩人 『神曲』『新生』

『()』：大赦の年 1300 年の復活祭に，人生の半ば(35 歳)にあった詩人ダンテが，暗い森に迷いこみ，聖木曜日から聖金曜日にかけての夜に始まり，一週間，ラテンの大詩人ウエルギリウスや永遠の恋人ベアトリーチェに導かれ，地獄，煉獄，天国の遍歴を行う。ラテン語ではなくトスカーナ方言で書かれた。

【人文主義 humanism】

：ギリシア，ローマの古典文学研究を通して，よりよき人間を形成するための知識（フマニタス）を追究した。

- ・()：イタリア，トスカーナ地方の詩人。代表作『カンツォニエーレ』。キケロ，アウグスティヌス等古典研究に没頭。
「()の本質を知らず，何故に我々は生まれたのか，何処から来たり，何処へゆくのであるか」ということに何の関心も持たずに追究されるような学問は無意味である」
- ・()：フィレンツェの文学者。ペトラルカの友人，古典文学に熱中。代表作『デカメロン（十日物語）』『人曲』ともいわれ，人間の赤裸々な姿を描く。
- ・()：プラトンアカデミーの新プラトン主義哲学者。世界哲学会議を企画するが異端の疑いを受け流会。その時の演説原稿が『()について』
自らの進むべき道を選択できる ()こそが人間の尊厳の根拠であるとした。
- ・()：オランダ出身，16 世紀ルネサンス最大の人文主義者。主著『痴愚神礼讃』。聖書を含む多くの古代文献を活字化。ルターに影響を与えるが恩寵と自由意志論で対立。
- ・()：イギリスの人文主義者。カトリックの信仰を貫きながら私有財産と貨幣の存在しない架空の島『ユートピア』の理想を著す。ヘンリ 8 世の改革に反対，刑死。

【政治思想】

- ・()：フィレンツェの外交官，政治思想家。主著『()』。
権謀術数主義（マキャベリズム）：結果の有効性のためには，いかなる非道徳的手段をも辞さないという君主像。ライオンの獐猛さと狐の狡猾さを政治に求める。

【ルネサンス期理想の人間像】… () 人 [l'uomo universale by ブルクハルト]

- ・()：画家として，また天文学，解剖学，物理学，哲学など多くの分野で才能を発揮した万能人。「最後の晩餐」（遠近法），「モナリザ」
- ・()：建築家，著述家。建築，彫刻，絵画に関する多数の論著を残しているほか，哲学，数学，文芸と多方面にわたる深い研究をおこなった人文主義者。

4.1.2 宗教改革

⇒資 p.168

宗教改革：中世カトリック教会を分裂させ、プロテスタント諸教会を樹立させた16世紀の教会改革。

ルター Martin Luther 1483-1546

：ドイツ、鉱夫の子として生まれる。ヴィッテンベルク大学神学教授。アウグスティヌス会修道士。オッカム主義の哲学研究と神秘主義との接触、聖書の研究を通して福音主義＝信仰義認説に到達し、ローマ教会と対立した。新約聖書の（ ）語訳。元修道女との結婚。改革の指導と著作活動、聖書講義などを行う。

1517年 『（ ）』をルターがヴィッテンベルク城内教会の扉に掲示

：当時ドイツで販売されていた贖宥状（免償状、~~免罪符~~）¹による罪の赦しを否定した文書。
⇒ライブチヒ討論(vs.神学者エック)でルターはフスの教説に福音的なものがあると主張
⇒教皇レオ10世、ルターに破門威嚇の大教書を送るが、ルターはそれを焼き捨てる

【ルターの思想】

主著：『95カ条の意見書（提題）』、

『（ ）』「キリスト者はすべての者の上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。キリスト者はすべての者に奉仕する僕であって、何人にも従属する。」

：ルターにとっての自由とは、福音への信仰から得られる罪からの解放のこと

※キリスト者の救済の仲介としてのカトリック教会の在り方を批判

・（ ）説：原罪を持つ人間が救われる（＝義とされる）のは教会の贖宥や善行によってではなく、十字架のキリストによる罪の贖いを信じることのみによる。
＝信仰のみ…新約聖書、（ ）による『ローマ人への手紙』に由来

・（ ）主義：教会の権威や伝承ではなく、聖書だけを規範的権威と認める。
＝聖書のみ…『ルター訳聖書』：ドイツ語に訳され、出版されて普及

・（ ）説：カトリック的な聖職者の権威を否定し、キリストを信じる者は誰もが等しく司祭であるとする。すべて信者は労働を通じて直接神に奉仕している。

「聖書には、学者たちや聖職者たちを単に奉仕者、僕、執事とよんで、つまり他の人々に向かってキリストと信仰とまたキリスト教的自由とを説教すべき任務を負う者となしているだけで、それ以外に何の差別も認めていない。」（キリスト者の自由）

※カトリックの召命＝神に召されて新しい使命（司祭職）につくこと

ルターの召命（英 calling 独 Beruf）＝すべての信者が神に召され、この世における務め（天職）を与えられる＝（ ）観

※エラスムスの自由意志論：神の恩寵と人間の自由意志に基づく行為によって救われる

ルターの自由意志否定論：自由意志は存在せず、神の恩寵によってのみ救われる。『奴隸的意志』

¹ 信徒がこれを購入することによって、自己の犯した罪の償いを免除されると信じられた、教皇が発行する証書

カルヴァン（カルヴィン） Jean Calvin 1509-64

：フランス出身。大学で法学と人文主義を修めた後、回心。フランス宗教改革の地下活動に参加。スイスのジュネーブの宗教改革を指導する。フランス、ネーデルラント、スコットランドの宗教改革に影響を与える。

【カルヴァンの思想】

主著：『()』

- ・ () 説：救われるものと滅びに至る者は、神の恩恵（恩寵）の選びによってあらかじめ決定されているという説。
 - ⇒ 人間は神の救済の予定を知り得ないが、神の選びを確認するために、信徒は神に召された職業を通じて、「神の栄光」を地上にあらわし、終末のときに完成される神の御業のため積極的に奉仕すべき。
 - ⇒ 職業倫理
 - ※ () 『プロテスタンティズム²の倫理と資本主義の精神』
 - ：カトリシズム＝この世に富を積むことは罪、カルヴィニズム＝禁欲的な職業生活とその結果としての利潤を容認 ⇒ 近代 () の合理的エートス（精神構造）

人間：自らのうちには救いの可能性を持たない

→キリストの十字架の贖いという恩寵による救いを知り神への感謝に導かれる

→積極的に地上に「神の栄光」をあらわす生活態度

- ・ () 政治：カルヴァンの指導のもと、スイス、ジュネーブで行われた、神聖な権威に基づいて行われた倫理的に厳格な政治
 - 神の支配と恵みはこの世のすべてに及ぶ。国家・富・経済活動・職業のすべては神が人間に与えた道具であり、それを正しく使うことによって神の栄光を地上にあらわす。

※ルター派とカルヴァン派

：カルビニズムは、伝統的社会秩序を重んずるルター派に比べると、資本主義的な営利活動の肯定、カトリックの君主に対する政治的抵抗を容認するなど、より自由主義的な性格をもっており、勤労者層のほか貴族の間にも支持を得て、フランスのユグノー戦争や、スペインの支配に対するネーデルラントの独立運動(八十年戦争)などで、その戦闘的なエネルギーを実証した。

² 1529年の第二回シュパイエル国会に提出した「抗議書」(プロテスタティオ)に由来。

4.1.3 近代自然科学思想

⇒資 p.176

中世末期までの自然学

- ・ () 論的自然観：アリストテレスの自然観…万物は最高の純粋な形相である神を究極目的として生成展開する
ex.運動：四元素（水,火,空気,地）の本来あるべき場所への移動…火は上に，石は下に
- ・ 天文学 = () 説：2世紀，アレクサンドリアの**プトレマイオス**『アルマゲスト』

ルネサンス，錬金術・占星術の全盛

- 前3世紀頃 ヘレニズム時代のエジプト…ヘルメス=トートの術：錬金術
 - 12世紀 アラビア語文献のラテン語訳 ⇒西欧に錬金術・占星術，流入
 - 15世紀 M.フィチーノがプラトン・プロティノス・『ヘルメス文書』³を翻訳
⇒新プラトン主義・錬金術・占星術の大流行
- ※ヘルメス主義：ヘルメス文書にもとづく，神秘主義的・魔術的・オカルト的思想

近代自然科学思想

神が創造した自然的世界の法則を探求することによって神の意志を知ることができるという視点から，創造主である神の言葉を自然の中に読みとろうとするもの。

- ・ () 1473-1543：ポーランドの天文学者。地動説（太陽中心説）の提唱者として知られる。著作『**天球の回転について**』…太陽中心のヘルメス主義の影響
- ・ () 1548-1600：イタリアのドミニコ会修道士，哲学者。ヘルメス主義の影響から**宇宙無限論**を主張し，異端として火刑となる。『無限，宇宙と諸世界について』
- ・ () 1564-1642：イタリアの自然学者，天文学者。数量的自然観の樹立。振り子の等時性，落体の法則，望遠鏡による木星の衛星発見，地動説。『 () 』
- ・ () 1571-1630：ドイツの天文学者，占星術師。コペルニクスの太陽中心説を支持。円運動で説明されていた惑星運動を楕円軌道で表す=**ケプラーの法則**。ヘルメス主義・新プラトン主義の影響のもと，宗教的情熱をもって宇宙の数学的調和を探求。
- ・ () 1642-1727：イギリスの科学者。万有引力の法則発見，微積分法創始。錬金術の実験，神学の研究。『自然哲学の数学的原理（プリンキピア）』
※「ニュートンは理性の時代の最初の人ではなく，最後の魔術師であった」ケインズ

³ 前3～後3世紀ごろ，エジプトで執筆された匿名の文書群で，導師ヘルメス・トリスメギストスが弟子に教えを伝授する形式で書かれている。内容は，(1)『ヘルメス選集』や『アスクレピオス』などを含む哲学・宗教的作品，(2)占星術，(3)錬金術，(4)魔術作品その他に分類できる。原文はほとんどの場合ギリシア語。

「自然科学」と「宗教的信仰」

1999年センター本試験 第3問 問題文

近年、自然科学の発達は目覚ましい。このことは、宗教の消滅を意味するわけではない。ある調査によれば、現在でも「神を信じている」アメリカの自然科学者は全体の39%である(注)。西洋思想史を振り返りながら、宗教的信仰と自然科学的知識との関係について考えてみよう。

13世紀のトマス・アクィナスは、理性的認識は神の恩寵の下でこそ成立することを前提として、両者の調和を説いた。けれども、14世紀のオッカム以後、自然を研究することと神を信仰することとを切り離す傾向が見られるようになった。

近代自然科学が成立するころ、ベーコンは、科学技術を通じて、知識および人間のあり方の革新を企てた。また、実験および観測機器を用いた自然観察というガリレイの方法は、自然研究の基本となった。ところが、コペルニクス、ガリレイ、ケプラー、ニュートンなど、近代自然科学の成立に寄与した人々のほとんどは、科学者であると同時に、敬虔なキリスト教信者でもあった。彼らは、神が創造した自然的世界の法則を探究することによって神の意志を知ることができるという確信をもって、自分たちの研究を推し進めたのである。つまり、彼らの科学に対する態度は、創造主である神の言葉を自然の中に読み取ろうとするものであった。この意味において、彼らの自然研究はキリスト教的色彩を強く帯びていた、ということができよう。

その一方で17・18世紀のヨーロッパでは、啓蒙主義と呼ばれる思想運動が展開された。その特徴の一つとして、知識をキリスト教の枠組みから解放しようとしたことが挙げられる。とりわけフランスの啓蒙主義者たちの間では、科学的・合理的な方法や考え方で伝統的な権威を打破しようという態度をとる傾向が存在した。そして、彼らは自然科学を、経験的な事実に基づいて構成される知識の体系として考えた。

自然科学とキリスト教信仰との分離を要求した啓蒙主義の思潮は、近代科学の発達に寄与した。これは宗教の力を弱める一因ともなった。しかしながら、科学と宗教は複雑にからみあっており、そう簡単に分離できるものではない。

注 この調査は、1996年に米国ジョージア大学エドワード・ラーソン氏らが実施したものである(1997年4月4日『朝日新聞』による)。

4.1.4 イギリス経験論

イギリス経験論 empiricism

：人間の知識，認識の起源を経験とみなす哲学上の立場。F・ベーコンに始まり，ロック，バークリー，ヒューム，A・スミスに続く，おもに 17～19 世紀のイギリスで主流だった思想。大陸合理論と対照的な思想。

フランシス・ベーコン Francis Bacon 1561-1626

主著：『() (新機関)』：アリストテレスの論理学書『オルガノン』に対抗する新しい学問方法論。

『ニュー・アトランティス (新大陸)』：科学と技術が人間社会に有効に利用される理想郷物語

【F・ベーコンの思想】

- ・大革新 *Instauratio Magna*：古代，中世を乗り越える新しい学問・思想の体系の確立を企てる
＝人間の生活を新しい発見と資財によって豊かにすることが学問の目標
cf. アリストテレスの観想の学問 ⇒ ベーコンによる経験や実験による学問
- ◎ () (*scientia est potentia*)：自然のなかに隠されていて掘り起こして用いることのできる力を探り当てることによって，自然現象を制御しようとする技術的感覚
⇒「自然は服従することによってでなければ，征服されない」
- ◎ () (偶像・幻影)：人間の知性をとりこにして，真理の認識をさまたげる偶像，先入観や偏見。 ⇒これをとりのぞくことが必要

【四つのイドラ】

- () のイドラ *idola tribus*：人類なるがゆえに人間本性にひそむもの
- () のイドラ *idola specus*：個人のもつ先入見
- () のイドラ *idola fori*：社会生活から起こる偏見
- () のイドラ *idola theatri*：学説から生じるもの

- ◎ () 法 *induction*：論理学で，個々の事例から一般的な法則をみちびきだすこと
⇒ 法則発見の手段としてF・ベーコンが重要性を主張
「新たに多くの事例を観察・実験を通して蒐集し，次に蒐集した事例を記述し，説明し帰納と演繹を関連させて仮説を立て，その仮説を事実に照らして確証し，因果関係を明らかにして，一般法則を探り出す態度」(『ノヴム・オルガヌム』)

※断片的な経験を集めるだけの「アリ」のような単純枚举を旧帰納法として批判し，「ミツバチ」のように雑多な花から同じ蜜を作り出す方法を新帰納法として提唱。

ホッブズ Thomas Hobbes 1588-1679

著作：『リヴァイヤサン』『物体論』『人間論』『市民論』

【ホッブズの認識論】

哲学の対象＝（ ）：分析・総合し得るもの（物質・感情・精神・国家社会）

唯物論：この世界に実在するものは物体のみであり、一切の事象は物体とその機械的、必然的運動である

哲学の任務＝事物の感覚器官への作用を説明すること。

ロック John Locke 1632-1704

著作：『人間悟性（知性）論』『統治論（統治二論）』

【ロックの認識論】

人間の心は（ ）・（ ）（tabula rasa）のようなもの。そこに感覚および内省の作用によってさまざまな観念がかき込まれる。＝生得観念（経験に由来しない知識）は存在しない
 感覚：感覚器官が外界の可感的な事物から触発されることを通じて心に伝えるさまざまな情報

バークリー George Berkeley 1685-1753

著作：『視覚新論』『人知原理論』

「存在するとは（ ）されることである。Esse est Percipi」

⇒ 物体の実体性を否定…視覚対象は心の中に存在するに過ぎない

精神＝知覚の主体（実体） < より大きな精神としての神 … 世界 ＝ 神の知覚

ヒューム David Hume 1711-1776

著作：『人間本性論（人性論）』

経験主義の徹底 ⇒（ ）論へ

実体の否定：ロックの物質的実体も、バークリーの要請する精神的実体も否定

物質的実体……物体の存在は想像の虚構の産物であり、外界の連続的実在も対象の同一性も証明できない

→（ ）律の否定：認識の対象の中に客観的にあると思われている「因果関係」は主観的な「心の決定」である

精神的実体……個人の自我の同一性の否定：人は独自の存在としての自分についての知覚をつねにもつわけではなく、自我とは「知覚の束」「いくつもの知覚が次々に登場する一種の劇場」にすぎない。

4.1.5 大陸合理論

大陸合理論 rationalism : 生得的な理性に認識の根拠を求めるデカルト, スピノザ, ライブニッツ, マルブランシュ, C. ヴォルフなどの認識論的立場。

デカルト 仏 René Descartes 羅 Rensatus Cartesius 1596-1650

精神と物質の徹底した () 論, () 論的自然観などによって近代科学の理論的枠組を最初に確立した思想家として, あるいはあらゆる不合理を批判検討することを教えた理性による解放者として, あるいはまた () (思惟, 意識)の哲学の創始者として以後の思想に大きな影響を与え, しばしば近代哲学の父と呼ばれる。

著作:『()』:『屈折光学』『気象学』『幾何学』の三つの試論の序論。デカルトの精神的自叙伝と思想の概略をあらわす。

『(形而上学の)省察』『哲学の原理』『情念論』

【デカルトの思想】

・理性(良識)の普遍性

「(: bon sens)はこの世で最も公平に配分されているものである……正しく判断し, 真を偽と区別する能力, それはまさしく良識または理性と呼ばれているものであるが, これは生まれつき, すべての人に平等である。」(『方法序説』)

⇒ 良い精神を備えているだけでは不十分。大切なのはそれを正しく適用すること

・四つの規則: 既知のことがらの論証を主としたスコラ論理学に代えて発見の方法を明示した

(1) 明証性の規則: 精神に明晰判明なもののみを真と認め, 速断や先入見を排除すること

(2) 分析の規則: 問題をできるだけ多くの小さい部分に分けてもっとも単純で認識しやすい要素を見いだすこと

(3) ()の規則: もっとも単純なものからもっとも複雑なものへと思考を順序正しく導くこと

(4) 枚挙の規則: 見落しがいかどうか十分に再検討すること

・ () : あらゆる学問の基礎となる確実なものを確立するためにすべてのことがらを疑う。

ex. 感覚, 数学的知識など(錯覚, 覚醒しているつもりで夢, 人を欺く悪しき霊)

⇒ すべてを疑ったのちにも疑いえないもの = 疑っている「私」の存在: コギト(自己意識)

・「()」 Cogito, ergo sum ; I think therefore I am.

精神としての「私」の存在 ⇒ 「私」のなかに「完全性」の観念がある ⇒ 「完全性」の観念(生得観念)は神の存在に由来する ⇒ 神の誠実さゆえに物的世界も実在する

・心身(物心)二元論

実 体	属 性	人 間
	思惟	
	延長 (=ひろがり)	

・ () 論的自然観: 宇宙の構造から地上の物体まですべて〈大きさ〉〈形状〉〈運動〉のみによって機械的に説明される。生命現象も機械的に理解し, たとえば動物は一つの自動機械とみなされる(動物機械論)。

- ・ () : 身体の働きかけを受ける精神の受動 passion 広い意味での感覚の一種
ex. 驚き, 愛, 憎しみ, 欲望, 喜び, 悲しみ
⇒ 欲望や情念を, 認識することによって統御
- ・ **高邁の心** : 自由な意志を行使して情念や欲望を統御しうる自己に対する尊敬の情念
⇒ 精神の唯一の能動である意志を正しく用いること = 徳
- ・ () 的道德 : 懐疑を進める間にも従っておくべき常識的道德
- ・ () 問題 : 精神と物体が別の実体であるならば, 人間の精神 (心) と身体 (物体) はどのように関わるのか? ⇒ 脳の松果腺が身体における精神の座

スピノザ Spinoza 1632-77

オランダのユダヤ人哲学者。ヨーロッパ哲学史上最大の形而上学体系の創始者。神に酔える哲学者
 主著『幾何学的秩序で証明された () : 倫理学』

: 無限実体である神から精神と自然世界の一切を幾何学的方法によって演繹しようとした。
 Cf. 定義+公理 証明⇒ 公理

「()」 Deus sive Natura

: 一にして全なる神は精神であると同時に自然そのものである

『エチカ』定理 11 「神, すなわちそのおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなり立つ実体は, 必然的に存在する」

→ () 論として批判された

: すべての事物は神の変状であり, 神はすべての事物の内在的原因であり, すべての事物は神の必然性によって決定されている → 神が世界に埋没してしまう (無神論)

永遠の相のもとに : 事物を偶然ではなく神の永遠なる本性の必然性そのものであると理解すること。

神 = 唯一の実体 : 思惟と延長は神 (同一の実体) の二つの属性

⇒ 心身問題を**心身平行論** (心身に相互作用はなく平行して対応している) によって乗り越える

ライプニッツ Leibniz 1646-1716

ドイツの数学者, 哲学者, 神学者。神学的目的論的世界観と自然科学的機械論的世界観との調停を企図。主著『()』

() 論 : 宇宙を構成する最も単純な要素, () は, 不可分で空間的広がりをもたない単純者, いわば**形而上学的点**。モナドは意識的もしくは無意識的知覚を有する魂に類似したもの, それぞれに固有の観点から宇宙のいっさいの事象を表出する個体的な実体である。しかしおのおののモナドは相互に他から独立であり, モナドはそこから物が入ったり出たりする窓をもたない(無窓説)。

・ () 説 : 現実的世界の創造に先立つ神の可能的世界の構想のうちに, 諸実体間の調和があらかじめ定められており, それにもとづいて創造された世界の事物の間に予定された調和の関係が実現されるとする説。

ex. 時計の比喻による予定調和の説明。二つの時計の指針が互いに厳密に合致するのは, (1) 直接的影響によってか, (2) 時計職人がそのつど手を加えることによってか, (3) 二つの時計の機構を, つねに完全に合致しうるように, 職人があらかじめ精密に組み立てたかのいずれかである。ライプニッツは (3) の〈予定調和〉の説をもっとも理性にかなうものとみなした

4.1.6 モラリスト

モラリスト moralistes (仏) : フランスで文学者のうち、特に人間の生き方を観察、描写して、人間の道徳的あり方を反省する作家を指して用いられる呼称。しかしより狭義には、エッセー、断章、格言等の比較的自由で短い表現形式で人間に関する省察を書き残した、作家・詩人でも劇作家でも小説家でもなく、また哲学者にも宗教家にも分類できない作家を指して用いられる。通例は16~18世紀フランスに輩出した**モンテーニュ**、**パスカル**、**ラ・ロシュフーコー**、**ラ・ブリュイエール**、**ボエブナルグ**、**シャンフォール**、**ジュベール**等がその代表的存在とされる。

モンテーニュ Michel Eyquem de Montaigne 1533 - 92

: 1581年から4年間ボルドー市長に選出され、カトリックの立場で国王アンリ3世につながりつつも、市を新旧急進派の抗争の場としないよう超党派的な方策を講じ、その安全を保った。3巻107章の《随想録》新版を88年に刊行し、そののちは読書と自著への加筆に日を送る。

主著『 (随想録) 』

思想的変遷 : ストア主義 ⇒ 懐疑論 ⇒ エピクロス主義

懐疑論 : 私は何を知っているのか? () Que-sais-je?

⇒ソクラテス的な謙虚さと他者への寛容を求める

パスカル Blaise Pascal 1623 - 62

: フランスの科学者、宗教思想家、文学者。早熟の天才でとくに数学に才覚をあらわし、早くから父とともに科学者の集りに出席したが、16歳のときに《円錐曲線試論》を発表(1640)し、射影幾何学における〈パスカルの定理〉を明らかにした。当時学界で論議的であった真空の存在を確証するために種々の実験を試み、〈トリチェリの真空〉が大気の重さ、さらに一般的には流体の平衡に基づいて生ずる現象であることを明らかにし、いわゆる〈パスカルの原理〉を確立した。しかし科学研究と並行して、46年パスカルは家族とともに当時の宗教界に深い影響を及ぼしたサン・シランの弟子たちの感化を受けて宗教的自覚を体験し、後にジャンセニズムと呼ばれる傾向に接近する(第1の回心)。

「人間は… () である」(『パンセ』347)

人間の 悲惨な側面 : 自然・宇宙に比べての小ささ、弱さ、有限性

偉大な側面 : 思考、精神、人間の尊厳の根拠

幾何学の精神 : 厳密で論理的な科学の精神

繊細の精神 : 柔軟で直感的な精神

⇒矛盾を抱えて不安な人間に救いを与えるのが神の愛

4.2 近代思想の展開

4.2.1 社会契約説

自然法

：人間の自然的性質に基づく普遍的・恒久的な法律や規範。これを人為法（実定法）の批判や改正の根拠にしようとする思想。

・自然法 Natural law の思想

アリストテレス：人間の自然＝理性 ⇒ 自然的な行為＝理性に即した行為

ストア派：全宇宙はロゴス（理性）によって支配されている。 ⇒ 自然法＝ロゴスから生じる法

トマス・アクィナス：自然法＝神の世界統治の理念が人間理性に刻印されたもの

（ ）：17世紀オランダの法学者，主著『戦争と平和の法』

「近代自然法学の父」「国際法の祖」

自然法＝理性的・社会的なかつ自由，平等な人間相互間の基本的社会秩序

国際法，公法，私法，教会法等，法の全分野にわたって自然法的基礎づけ

⇒ 人間の社会関係で法的規律に服さないものはない

社会契約説 Theory of social contract

：政治社会・国家の歴史的・論理的起源を個人相互の（ ）に認める学説。

ホッブズ Thomas Hobbes 1588-1679

主著『（ ）』：旧約聖書「ヨブ記」の巨大な海獣の名に由来。最初の近代国家論。国家を神の意志によるものや歴史的に与えられたものとしてではなく，自然権としての自己保存権を持った平等な個人の社会契約の所産と考えた。

ホッブズの自然権：（ ），生存のための欲求とそのため力の行使

ホッブズの（ ）状態：無際限に自然権を行使し，自己保存を追求した結果の戦争状態。

＝「万人の（ ）に対する戦い」「人間は人間に対して（ ）」

⇒ 理性が命じる「自然法」によって人々は契約を結ぶ

＝ 国家(コモンウェルス)に対して自然権を（ ）する。⇒戦争状態からの脱却

＝ 絶対主権への服従を存立条件とする国家状態の成立 ＝（ ）制の擁護

ロック John Locke 1632-1704

主著『統治二論（統治論，市民政府二論）』：フィルマーの（ ）説を批判，政治権力の絶対性を否定して，アメリカの独立宣言やフランスの人権宣言に大きな影響を与える

ロックの自然状態：統治はないが自然法のもとで人間は平和と自然権を尊重しあって生活

ロックの自然権：人間としての生存に不可欠の自然権として生命，自由，財産の（ ）権をすべての個人が生まれながらに持っている

⇒自然状態は所有権侵犯の危険性⇒自然権を守るため人々の契約により共同体に権力を（ ）

（ ）主義：立法権→議会，行政・連合（外交）権→国王

為政者が人民の自然権を侵害する場合 ⇒（ ）権：人民が政治権力を解体する権利

ルソー Jean-Jacques Rousseau 1712-78

主著『学問芸術論』：アカデミーの懸賞論文、『人間不平等起源論』：自然状態が社会状態にかわることによって人間の不平等が始まる、『社会契約論』、『エミール』：児童教育の福音書、『告白』

ルソーの**自然状態**：自由と平等と独立を享有する自然人。自己愛とあわれみの情を持ち無知だが幸福で善良。

ルソーの**社会状態（文明批判）**：（ ）**制度** ⇒社会的**不平等**の始まり（『人間不平等起源論』）

「人間は生まれながらにして**自由**であるが、しかしいたるところで**鉄鎖**につながれている。ある者は他人の主人であると考えているが、**事実**は彼ら以上に**奴隷**である。」（『社会契約論』）

= 人間は本来善良だが、学問・芸術、文化一般が人間を道徳的に退廃させる（『学問芸術論』）

⇒ 子供を社会の悪影響から守り、子供の自然性を保護する（ ）**的教育**を理想（『エミール』）

【社会契約論】

共同体全体に対する全員一致の契約：「各個人の自己の全面的譲渡」

⇒ 国家は一個の意志（ ）：共同体の公的な利益を基礎とする人民の意志）をもった単一の人格として成立

cf. **全体意志**：各個人の私的利益を優先する（ ）**意志**の総和 ⇒国家の意志にならない

法＝一般意志の表現 法に従うことはみずからがその一部をなす人民＝主権者の意志に従うこと

⇒（ ）**主権**

代議制（間接民主主義）：国民は選挙のときにのみ自由であり、選挙のあとは奴隷であると批判

⇒（ ）**主義**：理想の政治形態。国民が直接政治に参加。

※「**自然へ帰れ**（自然にしたがえ）」：自然状態への復帰ではなく、内的自然の回復をめざす

4.2.2 啓蒙思想

啓蒙思想 Enlightenment (光, 光によって明るくすること, 蒙(くら)きを啓(ひら)く)

: 17世紀, 18世紀の西欧で, **自然の光**としての**理性**を全面的に信頼し, 合理主義, 批判的精神をもって因襲, 迷信を打破し, いろいろの伝統, 特に()の権威に反抗し, 人間性の尊重, 新秩序の建設を主張した。近代市民階層の台頭にもなって広がり, 市民社会形成の推進力となった。

()による啓蒙の定義 「人間がみずからに負い目ある未成熟状態から脱すること」

17世紀 イギリス啓蒙思想: 内容はおおむね穏健, 認識論=経験論, 宗教=宗教的寛容, 理神論()論 **deism**: 近代の自然科学の発展と宗教抗争をきっかけにキリスト教の基盤を理性によって根拠づけようとする。神は世界と法秩序の創造者だが世界の外に立つ超越的存在者。世界は神の創造後には自動的に運動し続ける。

⇒ **宗教的寛容 tolerance**: ロック『寛容に関する書簡』: 政教分離, 良心の自由の理念

18世紀 フランス啓蒙思想: フランス革命を頂点に, **唯物論, 無神論**など徹底した過激な形態() **Ancien Régime**: 革命以前のフランスの政治社会体制

ヴォルテール

主著『()』: イギリスの思想(ニュートン, ロック)・文化の紹介とフランスの遅れた政治, 思想を批判。「フランス旧政体に投ぜられた最初の爆弾」⇒発禁処分。『カンディッド』: 哲学的風刺小説, 啓蒙思想の代表的存在。詩人であり古典主義悲劇の巨匠。

「恥知らずをひねりつぶせ」のスローガン⇒アンシャン・レژیーム批判の匿名文書を多数発表
理神論: 神の存在自体は否定しないが, 奇跡や復活など超自然的な教義をしりぞける。

⇒ **宗教的寛容『寛容論』**

※プロイセン王フリードリヒ2世に文芸の師として仕える

モンテスキュー

主著『()』: 共和制・君主制・独裁君主制の考察。地域の気候・地理など全般的な状況と, とるべき政体の間に関連があることを明らかにする。()によって個人の権利と自由は保障される。

『()の手紙』: ヨーロッパ旅行中の2人のペルシア人貴族が見聞を故国に書きおくる内容でフランスの政治や社会状況, 宗教問題, 文学を風刺

三権分立(権力分立): 立法権, 司法権, 行政権の分立による権力の抑制と均衡

・()派 **Encyclopedistes**: フランスの『百科全書』の執筆, 刊行に参加したフランス啓蒙思想家集団。『百科全書』(『百科全書あるいは科学, 技芸, 手工業の解説辞典』)はフランス大革命前夜の旧制度のもと, 学問と技術との集大成を実現した一大出版事業, 近代的な知識と思考方法によって人々を啓蒙し, 権威に対する批判的な態度をひろげた点で, 革命を準備するうえに果たした役割は大であったと評価される。

ディドロ

英語著作のフランス語翻訳家。ダランベールと共に『()』の編集責任者。

理神論 ⇒ スピノザ主義 ⇒ () 論・唯物論 ……政府と教会の攻撃を受ける

哲学, 文学, 演劇, 絵画, 音楽批評の著作

※晩年ロシアの啓蒙専制君主エカチェリナ 2 世の庇護を得る

ダランベール

フランスの数学者・物理学者・哲学者。貴族の私生児としてパリに生まれる。

ディドロと『百科全書』編集責任者

・ラ・メトリー

フランスの医師, 哲学者。主著『()』: デカルトの機械的自然観を人間にまで徹底させた機械論的唯物論 ⇒ 迫害を逃れてプロイセンのフリードリヒ 2 世のもとへ亡命

・エルヴェシウス

フランス百科全書派の一人。教会の権威。絶対王制の秩序に反抗した。

『精神論』: 快楽主義を極端に利己的な感覚論におしすすめる。判断力や記憶もふくめたあらゆる人間の能力は, 身体感覚に属している。人間活動の動機は利己主義しかない。そして, 自己犠牲さえ自分でえらびとった喜びなのだとしたら, 善悪・正誤の選択などありえない。

⇒ ソルボンヌ大学の神学部によって公共道徳のあからさまな侮辱であると非難され焚書

⇒ イギリス功利主義に影響

・ドルヴァック

ドイツ生まれフランスに帰化した哲学者, 百科全書派。

主著『自然の体系』: 唯物論の聖書といわれる。無神論的唯物論を展開。人間の道徳的行為の動機, 愛情, 憎悪, 利己心をそれぞれ物理学の引力, 斥力, 慣性との類比によって説明

⇒ 多くの徹底したキリスト教批判文書を偽名で刊行し, 「神の敵」と称された

・コンドルセ

フランスの啓蒙思想家, 数学者, 政治家, 百科全書派。フランス革命に参加, ジロンド党に属し, 立法議会, 憲法委員会で重要法案の起草に参画。恐怖政治に反対し, 捕えられて服毒自殺。

主著『人間精神進歩の歴史的素描』: 歴史を人類の進歩と確信, フランス革命をその人類進歩の最高の到達点とした ⇒ サン・シモン, コントに影響

教育の自律性確保: 教育を宗教的権威・行政的権力から独立させようと試みる。教育行政権を学者・知識人の互選による国立学術院にゆだねる構想

啓蒙絶対主義

18 世紀後半, プロイセン (フリードリヒ 2 世(大王), オーストリア (ヨーゼフ 2 世), ロシア (初期のエカチェリナ 2 世) などの君主自身が, 啓蒙思想を「上からの近代化」のために採り入れ, 官僚行政の拡充を通じて, さまざまの改革を試みたもの。啓蒙絶対主義は, 新時代の思想の部分的採用による君主制統治の合理化と補強を意味した。

4.2.3 カントとドイツ観念論

批判哲学 kritische Philosophie

イギリス経験論： 理性の否定 ⇒ 懐疑論：客観的真理の認識は不可能

大陸合理論： 理性の盲信 ⇒ 独断論：無批判に形而上学的思弁を展開

⇒カントの批判哲学：人間の認識に関して、わたしたちは何を知り得るか、あるいは知り得ないか、つまり、() がどのような権限と限界をもつかを確定しようとする哲学。

「概念(理性)なき直観(感性は)盲目であり、直観なき概念は空虚である」(『純粹理性批判』)

カント Immanuel Kant 1724-1804

：ドイツ(東プロイセン)の哲学者。ケーニヒスベルク大学の教授。

主著『() 理性批判』『() 理性批判』『() 批判』『永久平和のために』

【カントの思想】

・わたしは何を知りうるか? : 『純粹理性批判』

自然科学的な真理(の認識)はいかにして可能か?

従来の認識論：【自然の対象(客観)】——経験——【人間の表象(主観)】

カントの認識論：() 理性(認識能力)の限界を探る

【物自体?】→経験的素材←【感性】：時間・空間の形式←【悟性】：思考の形式→【理論的認識】

└─先天的な形式が認識の対象を構成する─┘

() 的転回：客観的对象を主観が認識するのではなく、主観が対象を構成することによって認識が成立するということ。

理論理性の限界：感性で捉えられる世界(現象界)を超えた形而上学の世界(英知界)を人間は認識できない。⇒「知る」ことはできないが「考える」ことはできる。

・わたしは何をなすべきか? : 『実践理性批判』

：人間の自由や靈魂の不滅、神の存在(形而上学の問題)は理論的には証明できないが、実践的な道徳法則のなかではそれらの存在が必然的に要請される。

・道徳法則：() 理性によってたてられる普遍妥当性を持った行為の法則。

←→自然法則：理論理性によって認識される因果必然性をもった法則

⇒人間が自然法則(必然性=快樂原則)に支配されて生きることは、意志の() の放棄にはかならない。

・×仮言命法(命令)：道徳法則に形式にはなり得ない

条件付きの命令「もし…ならば～せよ」：行為に価値を置くのではなく別に目的がある

・() 命法(命令)：道徳法則の形式

無条件の命令「～せよ」：行為そのものに価値があり普遍性を持つ

※動機説：結果的に善い行為になればよいのではなく、善意志(善いからするという義務)に基づくような行為の動機を重視する考え。⇒

⇒道徳法則の根本原理

「汝の意志の格率が、常に同時に普遍的立法の原理に妥当するよう行為せよ。」

・人間にとって自由とはどのようなことか？

⇒ (): 自ら命じた善意志による道徳法則に自らしたがうこと

←→ 他律：他者の命ずる規則や自然法則に基づく欲望にしたがうこと。

・**人格主義**：「汝の人格やほかのあらゆる人格のうちにある人間性を、いつも同時に () として扱い、決して単なる () としてのみ扱わないよう行為せよ」

人格：自律的に行為を行う自由の主体。自律こそ人間の尊厳の根拠であるという思想

・() の王国：人々が相互の人格への尊敬で結びついた道徳的共同体。

戦争は人間を手段とする行為⇒

『() のために』：常備軍の撤廃、国際平和機構の設立の構想。目的の王国の実現。

ドイツ観念論・理想主義 deutsche Idealismus

：フィヒテ、シェリング、ヘーゲルによって代表される。カントの思想における感性界と英知界、自然と自由、実在と観念の二元論を、自我を中心とする一元論に統一して、一種の形而上学的な体系を樹立しようとした。ドイツ観念論の中心的主張は自我中心主義にあり、フィヒテがこの傾向を一貫して保持したのに対して、シェリングは神と自然へと、ヘーゲルは国家と歴史へと自我の存立の場を拡張し、前者はショーペンハウアーの非合理主義に、後者はマルクスの社会主義に大きな影響を与えた。

・フィヒテ

主著『ドイツ国民に告ぐ』：ナポレオン占領下のベルリンでの講演。ドイツ国民意識の鼓舞。

：カントでは十分に統一されていなかった理論と実践、自然認識と道徳を、**自我の根元的な能動性を第一原理として統一**する。理論的、実践的な諸学のいっさいの究極的な成立根拠としての「知識学」は、端的に確実な知識、すなわち「私は存在する」という自我意識に立脚する。自我とは自由に行うことにおいて端的に存在する実践的な主体である。これを「事行」(タートハンドルンク)とよぶ。自我・事行は、学問およびあらゆる知識の基盤である諸事実の根底に存し、それを成立させる根源的な活動である。つまり、主観的、客観的を問わず、およそいっさいの事実は、実践的な自我・事行の活動の所産なのである。「知識学」は、こうした自我・事行のあり方を体系化することによって、すべての学問の、さらには知識一般の根拠づけを行うのである。

・シェリング

主著『人間的自由の考察』

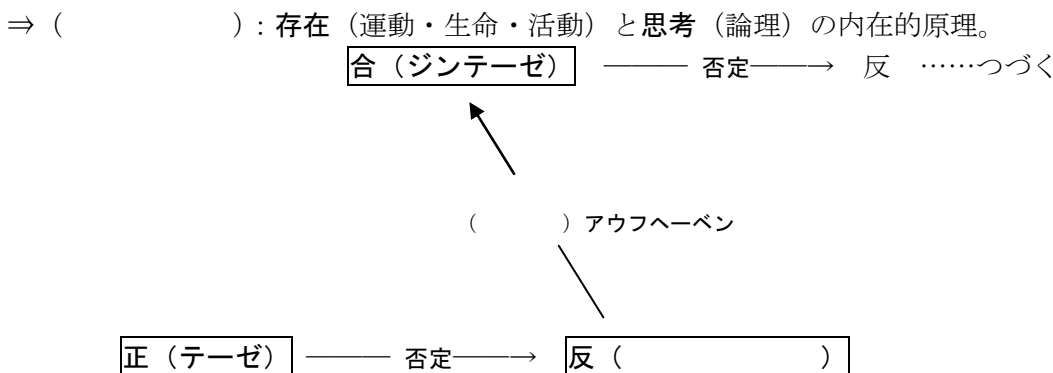
：ドイツ観念論とロマン主義の立場に立つ哲学者。自然と精神の対立を超え、主観と客観の根底に無差別な同一性としての絶対者をたてる。「同一哲学」は、「絶対者」を「同一律 (A=A)」の形式において存在する「理性」ととらえ、「光」を認識の原理、「重力」を存在の原理と規定することによって、大自然が確固たる「絶対者」「理性」の自己認識であることを明確にする。

ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770 - 1831

: ドイツの哲学者。ドイツ観念論の完成者。自然・歴史・精神の全世界を不断の変化・発展の過程としてとらえ、これを()の弁証法的発展とみなし、それを学的に把握するのが哲学であるとした。その正・反・合を基本運動とする弁証法の原理は()主義に批判的に継承された。主著『精神現象学』『論理学』『法律の哲学』『エンチクロペディ』

カントの二元論 ⇒ ヘーゲルによる批判

現象界	英知界	
主観	客観	
感覚的認識	物自体	→ 二極的な対立関係が統合へ向かう動的な過程となる
存在	当為	→ 矛盾 = 「あらゆる運動と生動性の源泉」(『論理学』)



『精神現象学』: 感覚という意識のもっとも低次の段階から、精神が己を外化しつつ絶対知に達するまで弁証法的に発展してゆく過程 (現象する精神) を明らかにする。

「理性的なものは () 的であり、() 的なものは理性的である」(『法の哲学』)

- ⇒ **世界史** : 絶対精神 (世界理性 = 絶対者 = 神の理性 = 理念) の自己実現の過程
 「世界史は自由の意識における進歩」(『歴史哲学』)
哲学 : 絶対精神が弁証法的に展開して自己に還帰する過程の概念的把握

- ・ () : 個人と社会を統一し真の自由を実現していく共同体
 cf.カントは内面の自由を重視

人倫の体系 (『法哲学』)

法 (客観的自由) ⇒ 道徳 (主観的自由) ⇒ 人倫 (主観的な道徳と客観的な法の統合の自由)

人倫の3段階

- ① 家族 : (正 : 全体性・普遍性) 自然性を基礎
- ② () : (反 : 個別性) 欲望の体系, 人間関係は形式的
- ③ 国家 : (合 : 人倫の最高形態)

4.2.4 功利主義 utilitarianism

功利主義：19世紀イギリスにはじまる，行為の善悪の基準を，その行為が快樂や幸福をもたらすか否かに求める倫理学説。 () = 幸福 = 道德的善，苦痛 = 不幸 = 道德的悪

- ・ **アダム・スミス** Adam Smith 1723-1790 自由放任主義の古典派経済学者
主著『()』，『諸国民の富』，『道德感情論』
利己心 self-interest と **共感** (sympathy：公平な傍観者としての良心) の予定調和
：利己主義に基づく自由競争経済は神の () により，社会的利益の増進となる。
() **homo economicus**：私利私欲に基づく経済活動をおこなう人間

ベンサム Jeremy Bentham 1748-1832

主著『**道德および立法の諸原理序説**』

- ・ () 的功利主義：快樂は7つの基準⁴により量的な計算 (**快樂計算**) が可能
⇒ **功利の原理**「正邪の判断の基準は () である」
the greatest happiness of the greatest number
- ・ 苦痛と快樂の四つの () (sanctions) あるいは源泉 = 行為の拘束力，刑罰となりうる
：①自然的 (物理的) 制裁 ② () 的制裁 ③道德的制裁 ④宗教的制裁

J. S. ミル John Stuart Mill 1806-1873

主著『**功利主義**』『**自由論**』

- ・ () 的功利主義：快樂の量的な計算を否定し，快樂の質的差異を重視する
⇒ 「満足した豚よりも満足しない人間である方がよく，満足した患者であるよりも満足しない () である方がよい」 (『功利主義』)
- () **的制裁**：ベンサムの四つの外的制裁ではなく，自然的感情としての良心の声が人を道德の原理にしたがわせる要因
⇒ イエスの **黄金律** = 功利主義道德の理想の極地
「人々にして欲しいと，あなた方の望むことを，人々にもそのとおりにせよ」 (ルカ 6:31)

【自由主義の5原則】

「私が判断して，現代の倫理にもっとも近い古典は，J.S.ミルの『自由論』 (一八五九年) である。その内容は，要約すると，①判断能力のある大人なら，②自分の生命，身体，財産などのあらゆる (自分のもの) にかんして，③他人に危害を及ぼさない限り，④たとえその決定がその当人に不利益なことでも，⑤自己決定の権限をもつと要約できる。これを **自由主義の五つの条件**と呼んでおこう」 (加藤尚武『現代倫理学入門』)

⁴ 強度，持続性，確実性，遠近性，多産性，純粋性，範囲の7つ。

4.3 現代の思想

4.3.1 実証主義・進化論

実証主義 positivism

：経験に与えられる事実の背後に超経験的な実体を想定したり，経験に由来しない概念を用いて思考したりすることを避け，**事実のみに基づいて論証を推し進めようとする主張**。19世紀後半から20世紀にかけて西ヨーロッパをはじめ全世界に及ぶ科学的認識論の支配的な立場。

（ g）Saint-Simon 1760-1825 フランス空想的社会主義者。ダランベールの弟子
従来の社会理論 ⇒ 単なる推測に基づく独断的で形而上学的なものと批判

実証主義の提唱：自然科学の方法を社会科学に適用し人間的・社会的諸現象を全体的・統一的に説明。経験的現象の背後に神・究極原因など超経験的実在を認めず，**観察された事実だけによって理論をつくり，経験的事実の裏づけによって実際に確認された理論こそ実証的 positif で科学的なもののみなされなければならない。**

社会生理学：天文学，物理学，化学，生理学という順序で実証的になってきた科学的方法を用いて社会現象を研究し，政治，経済，道徳，宗教などを含むいっさいの人間の・文化的・社会的事象の相互関連性を総合的・統一的に説明

（）Auguste Comte 1798-1857

：青年時代サン・シモンの秘書。社会学の父。革命後のフランス・ヨーロッパ：知的・精神的な無政府状態 ⇒ 知的・精神的な統一の樹立めざす

主著『**実証哲学講義**』

三段階の法則：人間の知識と行動は〈神学的〉⇒〈形而上学的〉⇒〈実証的〉に発展

社会学，実証哲学を提唱

・（）**説**：生物と構成要素の細胞との類比によって社会を超個人的実在であると説き，社会の解剖学的・生理学的研究として社会静学，社会の成長の研究として社会動学を設けた。

⇒ J. S. ミルに高く評価される。『**コントと実証主義**』（1865）「コントこそは実証主義の完全な体系化を企て，それを人間の知識のあらゆる対象に科学的に拡大した最初の人であった」

進化論 evolution theory

：生物は初めて地球上に現れた単純微小な原始生命から次第に進化したという説。造物主による動植物創造の観念に対立する。ダーウィンに至って体系として確立。

ダーウィン Charles Robert Darwin 1809 - 1882 イギリスの博物学者

・『（）』：自然淘汰 **natural selection** による適者生存 the survival of the fittest

：自然界の闘争の中で，有利な変異をもつ個体（適者）が生き残り，さらに繁殖する。新しい変種は適応力の劣っている祖型を滅ぼし，それにとってかわる。

（）Herbert Spencer 1820 - 1903 イギリスの哲学者，社会学者

主著『**総合哲学体系**』

社会進化論：「社会は有機体である」という前提から，社会は生物進化と同型の原因と理論によって不可避免的に進化し進歩するとする説。 ⇒ 自由放任主義的資本主義の擁護

進化論的倫理説：宇宙全体の進化が必然的に人間の幸福を実現していくとし，善い行為とはより進化した行為であると主張する。

4.3.2 社会主義

社会主義 socialism

産業革命 ⇒ 社会問題（社会的不正，貧富の差，失業，犯罪など）

資本主義社会批判：資本主義＝（ ）の私有，労働力を含む商品の自由競争の原則

cf. 労働力 + 生産手段（機械や原材料など）⇒ 財の生産

資本：価値の増殖のための運動体 G （貨幣）→ W （ある商品）→ G' （増加した貨幣）

⇒生産手段の共有と共同管理，計画的な生産と平等な分配を要求する思想・運動・社会体制

空想的社会主義

：マルクスとエンゲルス（科学的社会主義）以前の社会主義。（エンゲルス『空想から科学へ』）

ロバート・オーウェン（英）：英国ニューラナーク紡績工場，米国ニューハーモニー村

サン・シモン（仏）：貴族や地主でなく，産業者（資本家・労働者など）による社会

・（ ）（仏）：商業＝文明の弱点，ファランジュ：農村的協同組合

科学的社会主義

マルクス（独）：『資本論』『ドイツイデオロギー』『共産党宣言』

エンゲルス（独）：『空想から科学へ』『共産党宣言』

・労働の（ ）：労働の非人間的な状態。人間（類的存在：個と普遍の調和）の自由な自己実現としての労働が，資本主義によって資本と機械に強制された苦役となること。

・（ ）＝史的唯物論

：弁証法的唯物論（世界の本質は自ら弁証法的に運動発展する物質）を人間の社会や歴史に適用。

上部構造：政治的・法律的制度 + 観念形態（イデオロギー）ex.哲学，宗教芸術，道徳

↑ 制約・規定

（ ）＝下部構造：物質的生活の生産様式

生産様式の発展段階：原始共産制→奴隷制→封建制→資本主義→社会（共産）主義

※歴史は生産力と生産関係の矛盾を原動力として発展＝生産力の上昇→旧生産関係（生産手段の所有関係）に矛盾→（ ）：支配階級と被支配階級の争い）→社会革命 →新生産関係

・社会主義革命・（ ）革命：労働者階級（プロレタリアート）が農民をはじめとする勤労人民を指導してブルジョア政治権力を打倒し，プロレタリアートの独裁によって，資本主義制度を一掃し，社会主義社会の建設をめざす革命。

ex. ロシア十月革命（1917），第2次大戦後，人民民主主義革命（東欧や中国，北朝鮮，ベトナム），キューバ革命（1963），ベトナム革命（1976）

社会主義：能力に応じて働き，労働に応じて分配される

共産主義：能力に応じて働き，必要に応じて分配される

＝階級と搾取のない理想社会の実現をめざす

社会主義の展開

マルクス・レーニン主義

レーニン (1870-1924) : ロシア革命の指導者。

主著『() 論』: 資本主義の最高の段階。列強の世界戦争の必然性を説く

『国家と革命』: 国家は階級支配のための道具。プロレタリアート独裁。

帝国主義=社会主義革命の前夜, 革命の完遂のためプロレタリアートの独裁が必要

社会民主主義

() 1850-1932 : ドイツ社会民主党の理論家

主著『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』

マルクス主義の修正 : 唯物史観と暴力革命の否定。議会活動による社会改良

() **社会主義**

フェビアン協会 : イギリスの社会主義組織。代表的指導者, **ウェッブ夫妻**, **バーナード・ショー**, 資本主義社会の枠内で, 議会活動や労働運動により, 社会の弊害や矛盾を部分的に改良し, 労働者の地位を改善しようとする。

⇒イギリス () 党の結成に影響を与える。

4.3.3 プラグマティズム

プラグマティズム pragmatism

：アメリカの代表的哲学（実用主義）。Pragma（希）〔行為、行動〕に由来。形而上学に対峙し、具体的経験の中に科学的方法を生かすことを目標とする。代表者、パース、ジェームズ、デューイ。

パース Charles Sanders Pierce 1839-1914

：プラグマティズムを提唱。「（ ）クラブ」を結成し、ジェームズらと新しい思想を研究。デカルト以来の形而上学的で抽象的な論理学を実践的で行為に関わる科学的なものに変えることを提案
プラグマティズムの格率「概念を明晰にするためには、その対象がどのような実際的なかわりをもつ結果をもたらすかを知ればよい」ex)「重さ」という概念が意味するものは、「支える力がなければ下に落ちてしまう」という結果に全てが含まれている。つまり、重さという概念は、実験という行為とその観察可能な結果によって明晰化することができる。

ジェームズ William James 1842-1910

：アメリカの心理学者、哲学者。アメリカにおける実験心理学の創始者のひとり、哲学においてはプラグマティズムを広い思想運動に発展させ、現代哲学の主流の一つにした。

主著『プラグマティズム』『心理学原理』

真理の（ ）性：ある思想や知識が何らかの行動を産み、生活の中で実際役立つ結果をもたらす。
 cf. 「プラグマティズムの原理に立つと、神の仮説は、それがその後の最も広い意味で、満足に働かならば真なのである」『プラグマティズム』

デューイ John Dewey 1859-1952

：アメリカの哲学者、教育思想家。プラグマティズムの大成者。プラグマティズムに基づいた新しい教育哲学を確立。アメリカにおける新教育運動、〈進歩主義教育〉運動を指導。心理学では機能主義心理学の創設者

主著『学校と社会』『民主主義と教育』『哲学の改造』『人間性と行為』

（ ）主義 instrumentalism：人間の知性は人間がよりよくその環境に適応し、よりよい生活を営むための手段であり道具である。

創造的知性（実験的知性）：日常生活の中の問題に対して、見通しを立てて問題解決をはかる能力。

⇒人間性の発展

⇒（ ）学習：知識の暗記ではなく、実生活で問題を発見、解決する学習

learn by doing：「為すことによって学ぶ」

4.3.4 実存主義（実存哲学）

実存主義（実存哲学） existentialism

：19世紀の合理主義的観念論と実証主義に反対して、人間を理性や科学でとらえられない独自の存在とし、**真実で現実にある人間存在としての**（ ）を明らかにしようとする思想。広くはキルケゴール、ハイデッガー、ヤスパース、マルセル、サルトル等の思想をいうが、厳密にはヤスパースの哲学を実存哲学、ハイデッガーの哲学は現象学的存在論といい、サルトルのそれは、実存主義という。また、真の実存が神と関わろうとする**主体的決断**によって確立されるとする思想を有神論的実存主義。神の存在を否定して人間の存在の意味すら**主体的**に獲得しようとする思想を（ ）的実存主義という。

キルケゴール Kierkegaard 1813-1855 デンマークの思想家

主著：『あれかこれか』『死に至る病』『現代の批判』『不安の概念』

ヘーゲル批判：矛盾する「あれもこれも」求めるヘーゲルの思弁的弁証法を批判。『あれかこれか』の二者択一的決断によって**主体的**に生きる意義を説く。

『現代の批判』：風刺紙「コルサール（海賊）」キルケゴールへの個人攻撃→大衆の嘲笑を受ける

⇒（ ）性を失い水平化（平均化）した大衆を批判

・「死に至る病とは（ ）のことである」「絶望は（ ）である」（『死に至る病』）

絶望：神との関係を欠いて、自己のみに根拠を求めた結果の、肉体の死によっても終わることのない病
＝教会批判

実存の三段階

実存：理性に尽くされない自由な人間らしい生き方

1.（ ）的実存の段階：人生の不安を無責任な快楽を求めることで満たそうとする

⇒ 倦怠感・虚無感にとらわれて絶望する

2.（ ）的実存の段階：自己の良心に従って真実の人生を求めて生きようとする

⇒ 自己の罪深さ、無力さ、有限性に絶望する

3.（ ）的実存の段階：絶望と不安のうちにある有限な人間が、神の前にただ一人（ ）として立ち、信仰への決死の飛躍を試みる実存。

⇒不安と絶望のもとで《（ ）：「私がそのために生き、そして死にたいと思うようなイデー」》を見出そうとする。

ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900 ドイツ

主著『悲劇の誕生』『ツァラトゥストラはかく語りき』『善悪の彼岸』『力への意志』

ニヒリズム（虚無主義） nihilism：「至高の諸価値が、価値を失うこと。そこには目標が欠如している。なんのためにという問いに対する答えが欠如している。」（『権力への意志』）

・**受動的ニヒリズム**（ ）（頹廢）：キリスト教の道徳は（ ）道徳《強者にルサンチマン（怨恨）を持つ従順、同情、平和など弱者の道徳》であり、ヨーロッパ人の本来の個人の価値を窒息させた。⇒「（ ）は死んだ」（『ツァラトゥストラ』）

・（ ）的ニヒリズム：神なき世界、無意味・無目的な世界を、**力への意志**により新たな価値の創造へ向かう。獅子の精神と小児の創造力を持った（ ）の自由な生き方

・（ ）：世界は無意味な繰り返し。苦悩の中で目標のない人生を引き受ける（ ）。

ハイデッガー Martin Heidegger 1889-1976 ドイツ

：キェルケゴールの影響と（ ）の現象学の方法に基づき、実存主義的な存在論を展開。

主著『（ ）』

- ・（ Dasein）：存在そのものに驚き、存在の意味を問う主体である人間存在。
 - ・（ ）：現存在の根本的な存在の仕方。人間はいかなる反省にも先立って現に存在し、しかもその多義的な現存を各自的に引きうけることによっていつも本質的に、なんらかの世界の内に、この世界を了解しつつ存在せざるをえない。
- ⇒ 理由なく世界の中に投げ出されている世界内存在者は（ ）への**存在**であり、その根本的気分は**不安**。その不安をまぎらすため、世間の動きに没入して、主体性を失って平均的・画一的な（ Das man）へと墮落する。人間は気晴らしや享楽に逃避するのではなく、死とその不安を引き受け、真の実存を確立しなければならない。

ヤスパーズ Karl Jaspers 1883-1969

：ドイツの哲学者。精神病理学者として「世界観の心理学」で世界観の類型論を志し、ついで実存哲学に到達。

主著『理性と実存』

- ・（ ）：死・苦・争い・罪責のような変えることも超えることもできない状況
- ⇒ 限界状況に直面し挫折して、その不安と絶望の中で**超越者=包括者**の存在に触れる。そして世界は解読されるべき暗号となる。
- 実存的**（ ）：実存相互の「愛しながらの戦い」としての交わり。連帯。

サルトル Jean-Paul Sartre 1905-1980 フランス哲学者、小説家、劇作家。

主著『（ ）と（ ）』『嘔吐』『実存主義はヒューマニズムである』

- ・「**実存は（ ）に先立つ**」（『実存主義はヒューマニズムである』）
：人間存在（実存）にはあらかじめ本質が（神によって）与えられているわけではない。何の意味も理由もなく世界に投げ出されて存在し、その本質は未来に向けて自らを投げ出し（投企）、自由な決断で選び取るものである。【参照】ペーパーナイフの例
- ・「**人間は（ ）に処せられている。**」（『実存主義はヒューマニズムである』）
：人間の自由な決断は全世界への責任を負う。それは孤独であり不安をもたらす。不安から逃れるため自由を放棄することは自己欺瞞である。
- ・（ ）：社会参加、状況参加。自由な決断は他の可能性を捨て、全人類の在り方を選択し責任を負うことである。⇒（ ）主義への接近

4.3.5 現代のヒューマニズム

ヒューマニズム humanism と 人道主義 humanitarianism について

：西欧のルネサンスに固有な、ギリシア、ラテンの古典の学習を通じて人間形成をはかろうとする教養理念を指す特殊な意味での humanism に対しては、日本では〈人文主義〉という訳語が当てられるのが常であって、ヒューマニズムは、いちおう、それとは区別されたものと考えられている。日本ではヒューマニズムは、ルネサンスの古典的教養理念としての人文主義よりは、19世紀後半以降の近代思想における〈人道主義 humanitarianism〉に近いものとして受けとられており、その代表者としては、トルストイとか R. ロランとか A. シュヴァイツァーなどがあげられるのが普通である。(平凡社『世界大百科事典』より)

トルストイ Lev Nikolaevich Tolstoi 1828 - 1910

：ヤースナヤ・ポリャーナの伯爵家に生まれ、農奴たちに同情し、有閑社会の生活を否定。既成の政治・社会・宗教・教育などに反抗して、当時のロシアの国家・社会の矛盾をリアルに描出し、ロシア文学の写実主義的伝統を受け継ぐとともに、求道的な内面の世界を描いた。福音書の「山上の垂訓」に基づき、文明の悪に抗して、オプロシチェニエ oproshchenie(簡素な農民的生活を送ること)を理想とした合理的でピューリタンのアナーキズム的 성격の濃いキリスト教——いわゆるトルストイ主義——の教義は、このような中で生まれた。その中でも〈悪への無抵抗〉という考え方はロシア独特のものであるが、その弟子筋のガンディーによって結実したといえる。国家・軍隊や私有制を否定し、隣人愛の実践と非暴力主義による人類救済を提唱するトルストイの思想は、ロマン・ロランやガンディー、日本の白樺派など後代の作家に大きな影響を与えた。代表作は『幼年時代』『戦争と平和』『アンナ＝カレーニナ』『復活』など。

ロマン・ロラン Romain Rolland 1866 - 1944

：フランスの小説家、思想家。トルストイの思想的影響の下に出発、人類への愛、理想主義の信念に基づき、創作や平和運動に活躍した。「英雄とは思想や力で勝利した者ではなく、心によって偉大であった者のことである」という人道主義的ヒロイズム観に立って『ベートーベン』、『ミケランジェロ』、『トルストイ』、『ガンディー』など一連の伝記を著した。代表作は、ひとりの天才的作曲家の生涯を描きつつ、創造力と真摯、勇気、熱誠、そして人間愛をうたいあげた『ジャン＝クリストフ』。大戦後、とりわけ30年代には反戦反ファシズムの立場からソビエト社会主義への傾斜を深めた頃の著作が『魅せられたる魂』。彼の社会の不正や暴力と戦う実践的な姿勢を、() という。

シュヴァイツァー Albert Schweitzer (1875 - 1965)

：フランスの哲学者、神学者、オルガン奏者、医師。当時はドイツ領であったアルザスに生まれ、シュトラスブルク(ストラスブール)大学に学んで哲学博士となる。そのあと J. S. バッハの研究とパイプ・オルガンの演奏に傾倒するとともに神学研究を進め、1902年には同大学講師となる。05年の春に霊的衝撃を感じて黒人医療に一生を捧げる決意をし、医学の修業に入った。11年に結婚、12年に医学博士となり、13年には看護婦であった妻とともにフランス領赤道アフリカ(現、ガボン共和国)のランバレネに渡り、ここに熱帯病院を建てて医療活動に入った。シュヴァイツァーの神学研究は宗教史学派の枠内にありながらも、新約聖書の終末論と神秘主義を鋭くとらえた点で功績がある。同時に第1次世界大戦を契機として生まれた文明批判があり、それはヨーロッパ固有の否定精神を克服して、世界と人生の積極的肯定に至ろうとするものであった。() という標語は、ランバレネに行くオゴウェ川遡行のあいだにひらめいたものという。52年ノーベル平和賞を受け、その後核実験禁止を強く訴えた。主著『水と原生林のはざま』、『文化と倫理』。

マザー・テレサ Mother Theresa 1910 - 97

：カトリック修道女。ユーゴスラビアのスコピエに生まれ、ロレット修道会に入り、1928年インドのダーズリンに派遣され、後カルカッタの女子高校で教えたが、48年カルカッタの貧しい人々への奉仕に生涯を捧げることを決意した。50年に彼女が設立した**神の愛の宣教者会**は、カルカッタの癩病人、孤児、死を待つばかりの老人の世話から始めて、全世界の貧しい人々のために働いた。彼女は、現代世界における高貴な人間愛の象徴となり、79年ノーベル平和賞を受けた。

「愛の反対語は、憎しみではなく（ ）です」

「最大の不幸は飢餓でも病気でもない、自分が誰からも必要とされていないと感ずることです」

ガンディー Mohandas Karamchand Gandhi 1869 - 1948

：インドの政治指導者、思想家。〈マハトマー(偉大な魂)〉と称された。小藩王国ポールバンドルの大臣の長男として生まれ、イギリスに留学し、弁護士資格を得て帰国。南アフリカに渡り、そこに働くインド人労働者の市民権獲得闘争を指導する。自ら（ ）：**真理の把持**と名付ける**大衆的非暴力抵抗運動**を成功に導く。第一次世界大戦後、インドに戻る。インド国民会議派を率い、（ ）：**非暴力・不殺生**、**無抵抗**、**不服従**、**非協力主義**により、「**スワラジ**（自治獲得）・**スワデシ**（国産品愛用）」の**スローガン**のもと独立運動を指導。第二次世界大戦後、彼はインド民族の政治的独立と同時に、インド社会に巣食う不可触民制やヒンドゥー・ムスリム対立の除去という課題にも真摯に取り組むが、最終的には会議派指導部のインド分割承認への動きを阻止することはできず、独立後の48年1月30日、イスラム教反対の極右派ヒンドゥー主義者青年の手によって暗殺された。

キング Martin Luther King, Jr. 1929 - 68

：アメリカのキリスト教牧師。マハトマ・ガンディーの非暴力抵抗方式を人種差別撤廃を目指す**黒人解放運動**（ ）**運動**へ移植した黒人指導者。ジョージア州アトランタの有力黒人牧師の家庭に育った彼は、正義実現への手段を求めて思想的遍歴を重ね、ガンディーに到達した。55年赴任先のアラバマ州モンゴメリーで、座席の差別待遇に対するバス・ボイコットが黒人市民によって起こされたとき、キングはこれを**ガンディー方式とキリストの愛(アガペ)**を結合した**非暴力直接行動**によって成功に導く。1963年8月28日、職と自由を求めた「ワシントン大行進」として25万人近い人々がワシントンDCに集結した。そこですべての社会階層の人々が、公民権と、皮膚の色や出身などに関係なくあらゆる市民を対象とした平等な保護を求めた。この日キングの行った「私には夢がある」(I Have a Dream)の演説は、独立宣言にも盛り込まれている「すべての人間は平等に作られている」という理念を網羅するものだった。あらゆる民族、あらゆる出身のすべての人々に自由と民主主義を求めるキングのメッセージは、米国民権運動の中で記念碑的な言葉として記憶されることとなった。その次の年、米国連邦議会は「1964年公民権法」を通過させた。それは公共の場における人種分離を禁止し、公立学校・施設における人種統合を規定し、人種や民族に基づく雇用を違法とするものだった。68年4月、テネシー州メンフィスにて凶弾に倒れる。逮捕歴30回以上。

I say to you today, my friends,

so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream.

It is a dream deeply rooted in the American dream.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: "We hold these truths to be self-evident: that all men are created equal."

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

4.3.6 20世紀後半以降の思想

分析哲学 analytic philosophy

：哲学的問題に対して、その表現に用いられる言語の分析から接近しようとする現代英米哲学。ラッセルやウィットゲンシュタイン（1889 - 1951）が中心人物

・ラッセル Bertrand Arthur William Russell 1872-1970

：イギリスの哲学者、論理学者、平和運動家。ノーベル文学賞受賞（1950）。数学者として出発し、『数学原理（プリンキピア・マテマティカ）』（ホワイトヘッドとの共著）で今日の記号論理学・分析哲学の基礎を築き、平和主義・世界連邦主義の立場から政治・教育・文化の各分野で広範な著作活動を展開するとともに、第二次世界大戦後は、ラッセル・アインシュタイン宣言（1955）など、核兵器反対運動を指導した。

・ウィットゲンシュタイン Ludwig Wittgenstein 1889 - 1951

：哲学的問題がわれわれの使用している言語の働きの誤解から生ずる、ということを目指した。彼の前期の哲学では、言語は一定の事実を写す「像」であると考えた。これを言語写像説という。したがって、言語に対応する実体のない価値・倫理をめぐる哲学問題は、元来「語りえぬ」ものであり、言語ないし世界の限界の外にあるものであるとした。「語りえぬものについては、（ ）せねばならない。」 後期の哲学では、言語写像説を否定し、言語活動は社会活動の中に織り込まれている社会的なものと考えられるようになった。言語を、ちょうど駒をやりとりするチェスのように、言葉をやりとりするゲームとして捉えたのである。そこで「言語ゲーム」という概念が導入され、仮想的な言語ゲームの考察から多くの哲学的問題の解消が図られた。

科学哲学

ポパー Karl Raimund Popper 1902 - 94

：ウィーン生れのイギリスの哲学者、思想家。論理実証主義を批判し、**批判的合理主義**や**反証主義**を唱え、その後の科学哲学の発展に大きな影響を与えた。主著『探求（科学的発見）の論理』『開かれた社会とその敵』

反証可能性：経験科学的言明とそうでない言明を区別する概念。言明や理論は反証可能であるときにのみ経験科学的であるとする考え。現在の科学法則はこれまでの反証の試みに耐えてきた仮説のことであり、形而上学的には反証可能性がない。

批判的合理主義：人間の認識はすべて誤りうるから、公共的批判によって改善されることのできるという考え。

クーン Thomas Samuel Kuhn 1922 - 96

：アメリカの科学史家。科学や学問の発展を累積的な進歩ではなく、**革命的転換**としてとらえた。主著『科学革命の構造』

（ ）：「広く人々に受け入れられている業績で、一定の期間、科学者に、自然に対する問い方と答え方の手本を与えるもの」、広く共有された思考パターン。時代精神。

≡ **エピステーメー** (by フーコー)

() 学派

: 1930年代以降、ドイツのフランクフルトの社会研究所で活躍した一群の思想家たち。いわゆる西欧的マルクス主義の影響の下に、正統派マルクス主義の教条主義（歴史的情勢を無視し、その原則論をかたくなに守ろうとする公式主義）に反対しつつ、批判的左翼の立場に立って、マルクスをフロイトやアメリカ社会学等と結合させ、現代の経験に即した独自の**批判理論**を展開。

ホルクハイマー Max Horkheimer 1895 - 1973

: ドイツの哲学者、社会学者。フランクフルト学派総帥。マルクスの資本主義批判と世紀末芸術の市民社会批判を結合させて批判理論を展開。『理性の腐食』『道具的理性批判』

() **的理性**: 本来のあるべき「目的」をめざす理性ではなく、単なる技術的な「手段」と成り下がってしまった理性。

アドルノ Theodor Wiesengrund Adorno 1903 - 69

: ドイツの哲学者、社会学者。フランクフルト学派の指導者。主著『否定的弁証法』『啓蒙の弁証法（ホルクハイマーと共著）』『権威主義的パーソナリティ』

啓蒙の弁証法: 啓蒙的理性の築き上げた文明がなぜナチスのような野蛮に転落したかの考察

() **的パーソナリティ**: ファシズムを潜在的に支える人間の性格。他者の権威に盲従し柔軟性をもたず、自らの権威への服従を強要する性格。

ハーバーマス Jurgen Habermas 1929 -

: 第二世代フランクフルト学派の哲学者、社会学者

『公共性の構造転換』: 近代の公共性の成立したプロセスと現代の公共性の萎縮を描く。

『コミュニケーション的行為の理論』: 「対話的理性」「コミュニケーション的合理性」による生活世界の病理からの回復の可能性を探求。

() **的理性** (←→道具的理性): 暴力・抑圧に支配されずに対話を交わし、相互理解に到達し公共性を築こうとする理性

システム	システム合理性	政治・行政・国家（権力）と経済（貨幣）が人間の行為を調整しシステムを統合する合理性
生活世界	コミュニケーション的合理性	コミュニケーション的行為を通して互いに了解し合い、暴力や強制ぬきで合意と 公共性 を形成しようとする合理性

システム合理性による生活世界の植民地化 = 生活世界の合理化を批判した

現象学

() Edmund Husserl 1859 - 1938

現象学: フッサールが提唱した哲学。われわれの意識体験を単なる客観的世界の反映としてとらえるのではなく、意識体験の場所にこそ客観的世界の想定や、存在するものの意味が形成されるととらえ、われわれの意識にあらわれる現象をありのままに記述しようとする。

実証主義批判: 客観的世界の存在を無条件に前提とする**自然的態度**を批判する。

⇒**エポケー** (=現象学的判断停止): 客観的な世界の実在を素朴に認める態度を一時中止

⇒**現象学的還元**(または**超越論的還元**): 反省のまなざしを自分自身の意識作用そのものへ向ける「事象そのものへ」: 事象そのものが意識の中に現れる仕方を分析しようとする立場

() Maurice Merleau - Ponty 1908 - 1961

: 『知覚の現象学』で、サルトルが前提とする、主観/客観の対立図式を、デカルト以来の二元論として退けた。フッサールの現象学を踏まえて、世界を構成する主体を意識ではなく「身体」ととらえる。身体は、惰性的な物でもなければ純粋な意識でもない両義的な存在である。身体を人間と世界、主体と客体が混ざり合う「両義性」の場として、人間の言語活動も精神活動ではなく身体の所作として捉える思想を展開した。

() 主義 structuralisme

: 1960 年代以降フランスで生まれた現代思想の一潮流。レヴィ=ストロースは構造言語学や、数学、情報理論などに学びつつ、未開社会の親族組織や神話の研究に**構造論的方法**を導入して、**構造人類学**を唱えた。未開社会の近親婚タブーや交差いとこ婚の婚姻関係を問題として、そこにその社会を存続させるために働く**潜在的な相互依存の機能的連関**を構造としてとらえ、その構造を明らかにしながら人類全体を研究する理論。また、この立場から人類全体を問題にしようとする哲学。近代西欧の**理性中心主義のもの**の見方に**根底的な批判**を加えた。

() Ferdinand de Saussure 1857 - 1913

: スイスの言語学者、言語哲学者、記号学の提唱者。

人間の持つ普遍的な言語能力・シンボル化活動を**ランゲージュ**とよび、これを社会的側面である**ラング**(=社会制度としての言語)と個人的側面である**パロール**(=現実に行われる発話行為)とに分類

言語とは、人間がそれを通して連続の現実を非連続化するプリズムであり、恣意的(=歴史・社会的)ゲシュタルトにほかならない。したがって、言語記号は自らに外在する指向対象の標識ではなく、それ自体が**記号表現**(シニフィアン)であると同時に**記号内容**(シニフィエ)であり、この二つは互いの存在を前提としてのみ存在し、**記号**(シーニュ)の分節とともに産出される。

⇒文化は恣意的な記号の体系であるとする視点が現代思想に大きな影響を与える。
《実体》概念から《関係／差異》概念へのパラダイムシフト

() Claude Lévi - Strauss 1908 -

: 主著『野生の思考』フランスの文化人類学者。構造主義、構造人類学の提唱者。ソシュール、ヤコブソンの構造言語学に示唆を受けて、音韻体系や詩的言語構造と類比的なモデルを文化現象に広く見いだした。これまで非合理的なものとされていた未開人の**〈神話的思考〉**が、決して近代西欧の**〈科学的思考〉**に劣るものではなく、象徴性の強い**〈感性的表現による世界の組織化と活用〉**にもとづく**〈具体の科学〉**であり、**〈効率を高めるために栽培種化された思考とは異なる野生の思考〉**であることを明らかにした。

歴史主義 進歩主義	通時態	理性を持った人間の歴史は時代とともに進化、進歩発展する(最も進歩した西欧文明)	西欧中心主義 理性中心主義
構造主義	共時態	人間の思考は無意識的な構造に規定される 構造は要素の差異関係からなる全体	近代西欧思想への根本的な批判

フーコー Michel Foucault 1926-84

: フランスの哲学者。レヴィ=ストロース、アルチュセールとともに 1960 年代後半に構造主義の代表的思想家として脚光をあびた。《理性》や《主体》などの既成概念を**知・権力の分析**を通して**脱中心化**し、**ポスト構造主義**の思想家にも分類される。

『狂気の歴史——古典主義時代における』: 医者立場からではなく、狂人側の立場からとらえた**〈狂気の歴史〉**。**〈狂気の知〉**の発掘。それは、近代理性が狂気を分割し排除するプロセスをたどり歴史的な性格とその抑圧的性格を明らかにし、**権力が具体的に働く一つの場面を解明**した。

『言葉と物』: 17 世紀以降の生物学、心理学、言語学、経済学での人間に関する知識を、非連続的な社会変動の所産であるとみなして、**エピステーメー(認識の体系)**の概念によって知の構造的変化のありようを示した。人間が知の主体と客体になったのは**19 世紀**のことにすぎない。

⇒「人間は波打ち際の砂の表情のように消滅するであろう」: 人間=主体が知の中心であることの終焉

『知の考古学』: 構造主義と区別しながら自分の思想史の方法論を考察。テキストの作者や背景ではなく**テキストを形成する場としての言説(ディスクール)**を分析する。

『監獄の誕生』: 刑罰の歴史を分析することによって、近代社会の**権力の姿**をあきらかにした。ベンサムのパノプティコンのような監獄は、看守のまなざしを内面化することによって、囚人の身体を従順なものに調教する機能がある。監獄だけでなく、病院や軍隊や学校にも同様の、命令に対して自発的に服従する主体を作る**権力の技術**がある。農民が訓練によって兵士としての身体を獲得したり、学生が試験を通して真理に近づこうとするように、主体が訓練を通して支配に服従する**規律社会の権力のメカニズム**を示した。

ポスト構造主義

：1960年代前半フランスにはじまる構造主義の近代西洋中心主義批判は、レヴィ＝ストロースの構造人類学にも向けられるようになった。デリダやドゥルーズたちの思想は、構造主義が理論の前提とした言語学や精神分析の中にさえヨーロッパの形而上学の伝統や近代的理性の影響があることを指摘し、ポスト構造主義と呼ばれるようになった。構造主義の批判精神を深化したその思潮は、ポストモダニズムとも呼ばれながら展開した

() Jacques Derrida 1930 - 2004

：音声中心的ロゴス中心的な形而上学の支配を、フッサールの現象概念やソシュールの記号概念の中にも見とどけ、その克服を、差異化の作用一般にまで拡張されたエクリチュールの概念をてこにしてはかり、思考に新たな次元をひらく試みを重ねている。そのための戦略としての脱構築デコンストラクションは、特にアメリカを中心として批評界にも影響を与えた。

()：もともとハイデガーが『存在と時間』の中で用いた、存在論の歴史に対する「解体 (Destruction)」という語をデリダがフランス語訳したものの。ハイデガーが存在問題の忘却の起源をギリシア以来の形而上学の中に見出したように、デリダもプラトン以来の形而上学の二項対立的な階層秩序が、西洋的思考の根底にあることを指摘する。それは、内部／外部、知性／感覚、意味／記号、自己／他者、同一性／差異、男／女、西洋／東洋など、二項対立と、それぞれの前者に支配的優位性を持たせる思考である。デリダはフッサール、ソシュール、レヴィ＝ストロースたちのテキストの中に見られる形而上学的秩序が、実は決定不可能であることを、そのテキストそのものの中から暴き出していく。脱構築とはこのようなテキストの読解を通した形而上学的思考の解体作業のことである。

ジル・ドゥルーズ Gilles Deleuze 1925-1995

：ドゥルーズは精神分析医フェリックス・ガタリと『資本主義と分裂症』のタイトルで2巻の共著を発表した。1巻『アンチ・オイディプス』では社会と歴史を作る存在を人間という単位ではなく、人間の欲望とモノの結びついた複数の「欲望する機械」ととらえ、その組み込み方によって社会の歴史や人間などを類型化する。この方法をスキゾ分析 (分裂者分析) という。彼らはフロイトのエディプス・コンプレックスの概念を、父-母-子の家族に欲望を封じ込めるための、あるいはパラノイア (偏執症) 的な妄想を拡大するための装置ととらえる。この装置が排除してきたスキゾフレニー (分裂症／統合失調症) のダイナミックな欲望の流れを捕捉する方法がスキゾ分析で、未開社会、前近代社会と資本主義社会などを分析する新しい視点を示した。2巻『千のプラトー』では、精神分析や二元論を中心から分化していくツリー (樹木) 状の思考モデルとして批判し、それに対してリゾーム (根茎) という、中心も周辺も、始まりも終点も持たず、内部も外部もない思考モデルを提唱した。それは伝統的哲学を定住 (同一性) の思想として退けて、スピノザとニーチェの差異の思想の延長線上に遊牧民 (ノマド) の思想の逃走線を引こうとするものだった。

ポストコロニアリズム

：15世紀以降の西欧近代の歴史を植民地帝国主義の時代ととらえなおし、近代の思想や学問の中の西欧中心主義、植民地帝国主義正当化機能をあばき、脱構築化する思想。

エドワード・サイード Edward William Said (1935-2003)

『()』：サイードは、フーコーの言説 (ディスクール) 概念を手がかりにして、西洋のテキストの中に存在するエキゾティックな「他者」としての「オリエン特」像を分析した。西洋の人々を書きあらわしてきた東洋は、根源的にヨーロッパとは異質な空間であり、後進性や官能性、敵対性などのイメージが与えられてきた。それは、西洋人が自らの文化的優位を示すために作り上げてきた、西洋中心主義的な「オリエン特」像である。そこから遅れたオリエン特をヨーロッパが救済するという図式が生まれ、近代の植民地主義や人権差別主義・自民族中心主義を正当化する根拠となった。このような西洋の東洋に対する文化的支配の様式をサイードはオリエンタリズムとして批判したのである。

J. () John Rawls 1921 - 2002 『正義論』

() としての正義：功利主義（最大多数の～）はマイノリティにとって公正ではない。
 不平等は最も不遇な立場にある人々の便益を最大化することによってのみ容認される。
 ⇒アフターマティブ・アクション（積極的差別是正措置）：差別されてきた人々の社会的地位の向上を図るために、教育や雇用などで積極的な優遇措置をとること。

無知のヴェール：自分の位置や立場について全く知らずにいる状態。自身の利益に基づかない公正な社会契約を可能にする

正義の二つの原理

第一原理《平等な自由原理》すべての人々が、他者の自由と両立できる限り、できるだけ広い範囲の基本的自由を平等に持つべきであること。

第二原理 社会的・経済的不平等は次の二つの条件を満たすものでなければならない。

(a) 《格差原理》不平等の結果、もっとも不遇な立場にある人々の利益を最大化する（暮らし向きの改善を図る）こと。

(b) 《公正な機会均等原理》公正な機会の均等を確保した上で生じる不平等であること。

アマルティア・() Amartya Sen 1933-

：倫理的な厚生経済学のためにセンがとった方法が () アプローチである。まず個人の福祉をその人の生活の良さと解釈し、その生活を様々な () の集合と考える。機能とは、その人間が実際に何をしているか、何を選択できるかという在り方、生き方の一つ一つのことである。たとえば、「適切な栄養を得ているか」「早死にしていないか」など基本的なものから、「幸福であるか」「自尊心を持っているか」「社会参加しているか」などの複雑なものまで多岐にわたる。これらの機能の全体をセンは潜在能力 ((ケイパビリティ)capability) と呼ぶ。国家の経済成長や個人の所得だけで福祉をとらえるのではなく、個人が選択できる生き方の幅 (すなわち自由) を広げる福祉政策をめざすのが潜在能力アプローチである。

ハンナ・() Hannah Arendt, 1906-1975

主著『全体主義の起源』

『人間の条件』：人間の活動的生活(vita activa)を「労働」(labor)、「仕事」(work)、「活動」(action)の三つに分類した。「労働」は自分の生命を維持するためにやらざるをえない行為、「仕事」は人工的で耐久的なモノを生産する行為、「活動」は言論などによって多数の人間と関わる行為であるという。彼女はギリシャのポリスの政治と現代社会を比較しながら、ポリス政治で重視されていた公的領域での政治・言論的な「活動」が失われ、公私が混同する中で「労働」が優位になった現代の社会を批判した。

エマニュエル・() Emmanuel Lévinas 1905-1995

：ホロコースト生還者レヴィナスは、西洋哲学を覆う全体性の概念を批判する。他なるものを同化吸収してしまおうとする「自己」の全体化への志向は、ヘーゲルの国家観や、ハイデッガーの現象学の中にも見られるという。しかし、他を征服し所有しようとする、全体性の概念がもたらすものは殺人と戦争に他ならない。彼は、人間が無限なる神を全体的に把握することが不可能なように、自己が同化吸収できない絶対的「他者」の存在を指摘する。主体にとって殺人の対象である他者は「()」という無限性を持って抵抗する。全体性を超越した他者の存在の無限性を、彼は他者の顔と表現し、他者と関わる主体の倫理学を、現象学とユダヤ教的解釈学の方法に依拠しながら確立した。